

論文

尖閣諸島に関する中国史料の研究(五)

—琉球冊封使の詩文を中心に—

Chinese Historical Records Concerning the Senkaku  
Islands (V) : A Study of the Chinese Envoys' Poetry

班 偉<sup>1)</sup>

Han I

キーワード：尖閣諸島、釣魚嶼、漢詩、琉球冊封使

Key Worlds : The Senkaku Islands, Diaoyu Yu, Chinese Poetry, The Ryukyu-Envoy

はじめに

1372 年から 1866 年までの約五百年間、計 23 回にわたって明清王朝の冊封使が琉球に派遣された。明代 11 回目の冊封使陳侃から数えれば、清代最後の冊封使趙新まで 12 種の使琉球録が著されたが、彼らの詩文集も十数点現存している。その題材として、出使抱負・漢官威儀・国威発揚・琉球風物・異国情緒・交友応酬・遊宴贈答・思慕望郷など多岐にわたり、中には尖閣諸島を詠んだ詩句も若干含まれている。尖閣諸島の領有権を主張する中国・台湾側からすれば、恰好な「歴史的証拠」として利用しない手はないのだが、よりによって史料の隠蔽・曲解も甚だしい<sup>1)</sup>。琉球冊封使の詩文は、海道針経・使琉球録・明代海防書・古地図などと並んで、尖閣諸島の歴史研究にとって貴重な素材なので、本稿では、関連詩句の解析・検証を通じて、冊封使が抱く尖閣諸島イメージの実像を探ってみたい。

一、航海詩に詠まれた尖閣諸島の情景

本題に入る前に、先ず海道針経や使琉球録の記載に基づき、明清時代における福建—琉球航路の概況について触れておきたい。一般に、冊封使や随員らを乗せた封舟が明代は福州の梅花港から、清代はその外港である五虎門から出帆するが、倭寇・海賊が跳梁跋扈していた時期に閩安鎮巡検司の巡視船が開洋するまで護送することが慣例だった。封舟は外洋に入って那覇を目指して帆走する途上、航路に点在する標識島を見定めながら海を渡っていくのだが、福州の港から出航し、まず東へ進み、最初の目標は「小琉球」(台湾)である。そこから更に進み、基隆の入り口にある「鷄籠嶼」を見定めてから、北へ針路を変える。すると、基隆東北の海上に鼎立する三小島のうち、「花瓶嶼」と「彭佳嶼」が現れ、更

<sup>1)</sup>山陽学園大学総合人間学部言語文化学科

に東北東に進むと尖閣諸島が見えてくる。当時、「釣魚嶼」（魚釣島）・「黄尾嶼」（久場島）・「赤尾嶼」（大正島）のいずれも重要な標識島として認識されていた。赤尾嶼の次に現れる「古米山」（「姑米山」、久米島）を過ぎ、「馬齒山」（慶良間諸島）へ進み、そこを東進すると「那覇」港に到着するが、多くの封舟は「葉壁山」（伊平屋島）辺りに行き過ぎてしまい、首里王府の差し向けた多数の小船に曳航されることがしばしばあった。平均で一、二週間を要する航海途中、故国を遠く離れ、難破の覚悟で冒険の旅に命を懸ける冊封使たちが雄大な海の景色を目の当たりにし、胸に迫る万感の思いを詩文に書き表したのである。

明嘉靖十三年（1534）の冊封使を務めた陳侃（1489～1538）は、初の使琉球録を著し、「釣魚嶼」を記した現存最古の史料を残したが、詩文は未詳。次使の郭汝霖（1510～1580）は嘉靖四十年（1561）に派遣され、帰任後、『重編使琉球録』を書き著した。他に『石泉山房文集』の著もあり、「航海歌」「南台歌」「鼓山望海歌」（巻一）、「奉使琉球出都門」「觀海四首」（巻二）、「洋中」「掛帆」（巻三）、「開洋」「琉球哪覇港」（巻四）、「琉球帰棹」（巻五）といった航海詩や、「書扇別中山王」（巻三）、「奉使琉球潞河解纜」「波上寺」（巻四）、「辞琉球王宴」（巻六）など琉球役人・文人との唱和詩を多数収めている。内容的には、「皇心布美澤、四夷悦来同。」（「奉使琉球出都門」）、「大明皇帝徳天同、礼楽車書万国通。一自中山帰化後、王封世々邁夷東。」（「封王十詠」）といった中華思想ふんぶん匂う「お硬いもの」が目立つが、尖閣諸島の景観を詠んだ巻三の二首は瑞々しい。

\* 「天畔一舟横、長風万里行。黄鰲浮浪遠、釣嶼蘸波明。……」（「釣嶼」）

（訳：大空の際に孤舟がゆらゆらと、順風に乗じて万里の浪涛を行く。黄尾嶼が荒海に浮き沈み、釣魚嶼が碧水に映る）

\* 「赤嶼盤盤立、不風舟動揺。……海邦忽伊迓、早晚听夷謡。」（「赤嶼」）<sup>(2)</sup>

（訳：赤尾嶼が稜々とそそり立ち、風なくとも舟が揺れる。……忽ち琉球国に近づき、朝夕に琉球男たちの望郷の謡が聞えてくる）

郭汝霖の『重編使琉球録』を繙くと、航海日誌には「（五月）二十九日、至梅花開洋。幸値西南風大旺、瞬目千里。長史梁汝舟在後、不能及。過東湧、小琉球。三十日過黄茅、閏五月初一日過釣嶼。初三日至赤嶼焉。赤嶼者、界琉球地方山也。再一日之風、即可望姑米山矣」と記しているが<sup>(3)</sup>、「黄尾嶼の通過が釣魚嶼より先」「赤尾嶼から琉球領に入る」といった記載は、他の使琉球録と異なり、注目に値する。

萬曆七年（1579）、正使簫崇業（？～1585）・副使謝傑（？～1604）が出使の命を受け、琉球へ渡った。帰国後、共撰した『使琉球録』には「皇華唱和詩」の附巻があり、「梅花開洋」「過東沙山」「迎薰歌」などの航海詩の中、「見山謡」の島影描写が生き生きとしている。

\* 「水国迢迢幾万里、天涯浩浩無窮已。……平嘉嶺已踰、鷄籠嶼安在？花瓶隱不浮、釣魚沈翠黛。」（「見山謡」）<sup>(4)</sup>

（訳：海で隔てられた琉球は遥かなる彼方にあり、天の果ては浩々として窮まるころがない。……平嘉嶺（彭佳嶼）はすでに通過したが、鷄籠嶼はどこだ？花瓶嶼は浪涛に見え隠れし、釣魚嶼は濃紺の水中に沈んだまま）

簫崇業『使琉球録』の「使事紀」を見ると、一行を載せた封舟が航路から外れたため、尖閣諸島を含む一連の標識島をつい見失ったことが分かる。簫謝の次使として、萬曆三十四年（1606）に夏子陽が遣わされた。彼の『使琉球録』も秀作であるが、詩文は散逸した。その後、崇禎六年（1633）に派遣された杜三策は使琉球録も詩文も残さず、従客胡靖の著

『琉球記 附中山詩集』は、その欠を補うものとしての史料価値が高い。ただ、航路上の各島の記載・描写はすっぱり抜け落ちてしまっている。

琉球冊封使の派遣は、明代を通して15回行われたのに対し、清代は8回で終わった。康熙二年(1663)、張学礼は清朝最初の冊封使として琉球へ渡った。帰国後、彼は『使琉球紀』『中山紀略』を著したものの、詩文集はない。一方、康熙二十二年(1683)の冊封使汪楫(1636~1699)は、碩学の名に相応しく、『使琉球雜録』『中山沿革志』『冊封疏鈔』の他に、『觀海集』など数種の詩文集を後世に残した。『觀海集』の「中流」を見ると、島名こそ記されていないが、航海中の夜景が詩情豊かに詠まれている。

\*「廿五廿六夜無月、峭帆一往開蒼茫。不知水色映天色、只覺星光勝月光。」<sup>(5)</sup>

(訳：二十五、六両日は無月夜、孤帆一つで蒼茫たる暗い海を漂う。海水か夜空か区別も付かず、満天の星が煌き月光にも勝る)

汪楫『使琉球雜録』卷五「神異」には、「及二十四日天明見山、則彭佳山也、不知諸山何時飛越。辰刻過彭佳山、酉刻遂過釣魚嶼。……二十五日見山、応先黄尾、後赤嶼。無何遂至赤嶼、未見黄尾嶼也。薄暮過郊(或作溝)……二十六日、倏忽已至馬齒山。」とあり<sup>(6)</sup>、尖閣諸島周辺の海域を通過した際に目睹した大海原の夜景を詠んでいるのが分かる。

さて、康熙五十八年(1719)の冊封副使を務めた徐葆光(1671~1740)が著した『中山伝信録』とえば、使琉球録の白眉と評されている。その琉球体験を綴った吟詠は、主に『舶前集』『舶中集』『舶後集』の三巻からなる『海舶三集』(別名『奉使琉球詩』)にまとめられており、中でも『舶中集』には航海・琉球風物・尖閣諸島を詠んだ詩句が多い。

\*「南風三日越重嶮、釣魚諸嶼随帆漂。」

(『舶前集』「前使汪檢討楫家獲觀琉球画障、作歌示令子宝裘、令孫篋先」)<sup>(7)</sup>

(訳：南風が三日連続で吹き続け、帆の影に釣魚嶼などの島々が次々と現れた)

\*「鷄籠山去釣魚台、黄嶼応先赤嶼来。旗脚靈風三日夜、暗中飛過幾蓬萊(舟行太東下、諸嶼皆當見不見)。」(『舶中集』「海舶謡」)<sup>(8)</sup>

(訳：鷄籠山から釣魚台へ渡っていくと、黄嶼が赤嶼より先に現れるはずだが……。

船の旗を翻す季節風が三日三晩吹き続け、暗闇の中、幾つかの蓬萊島を通り過ぎていく。船は東に行き過ぎてしまって、見えるはずの島々はつい見なかった)

\*「首取鷄籠山(台湾一名鷄籠)、目断釣魚嶼。」

(『舶中集』「舶行七日至琉球、從客函寧翁長祚作帆海千字詩。因用其韻載述成篇」)<sup>(9)</sup>

(訳：先ず鷄籠山を通過したが、釣魚嶼を探そうとしても目途は途中で断ち切られた)

『中山伝信録』卷一の「前海行日記」によると、「(五月)二十四日……過米糠洋。……當見鷄籠山、花瓶、棉花等嶼及彭家山、皆不見。……二十七日、……天将明、応見釣魚台、黄尾、赤尾等嶼、皆不見」と言う<sup>(10)</sup>。つまり、徐葆光一行も簫崇業の時と同じように、航路が逸れて一連の標識島を見失ってしまったのである。徐葆光は実際に尖閣諸島を目睹したことがなく、汪楫ら先輩冊封使の記録に拠って詠んだものと思われる。そのせいか、詩文の島名表記において、「釣魚嶼」と「釣魚台」の混用が目立つ。

徐葆光の後、乾隆二十一年(1756)に遣わされた冊封副使の周煌(1714~1785)も、功成り名を遂げた学者として、『琉球国志略』以外に、『海東集』『海東続集』『海山存稿』など数種の詩文集を書き残した。中には「五虎門放洋」「望鷄籠山」「泊姑米山二首」「姑米阻風二首」といった航海詩が多く、ここで尖閣諸島関連の詩句を取り上げてみよう。

- \* 「……望鷄籠之顛（自閩五虎門放洋、十一更見鷄籠山）、歷花瓶之島（花瓶嶼近鷄籠）。……釣魚之台（自花瓶十更見釣魚台）、渺若玦環。黃尾赤尾（釣魚台四更見黃尾嶼、十更見赤尾嶼）、泱泱其間。姑米点墨（自赤尾六更見姑米山）、馬齒浮鬢（馬齒有東西二島、為入琉門戶）。」（『海東集』卷上、「中山賦」）<sup>(11)</sup>

（訳：鷄籠嶼の頂を望み、花瓶嶼を過る。……釣魚台は微かに環の如き、黄尾嶼と赤尾嶼は海の中に浮き沈みする。姑米山が一滴の墨を点じ、馬齒山が鬢を浮かべる）

- \* 「一髮青山認釣絲、投竿終古拂珊瑚。試看今日舟人喜、不是臨淵起羨時（海行見山則喜）。」（『海東集』卷下、「望釣魚台」）<sup>(12)</sup>

（訳：青山の稜線が釣り糸のように見え、釣り竿が珊瑚に引っ掛かる。今日、船乗りが皆大喜びし、淵に臨んで羨ましがるときでなくても。航海中、島が見えると喜ぶ）

- \* 「海舶合同黃帽住（接封大夫黃帽）、水仙元共赤鱗帰（過釣魚台、有大鯊魚隨舟）。」（『海東集』卷下、「海上即事四首」）<sup>(13)</sup>

（訳：封舟には黄帽をかぶる琉球国の接封大夫が同乗しており、釣魚台を通過した際、巨大なサメが封舟に添え泳いでいた）

周煌と同行した正使全魁（？～1791）は帰任後、『乗槎集』を著したが、詩集の中に「自南台登舟泛海、抵中山即事十四首」があり、尖閣諸島を詠んだ詩句が二首含まれている。

- \* 「万片余霞紅似綺、釣魚台遠一螺青。」（其六）

（訳：海に映る万片の霞の光がシルクのように輝き、遠方の釣魚台は螺のように青い）

- \* 「黃尾嶼連赤尾嶼、舟人遙望尚疑猜。」（其九）<sup>(14)</sup>

（訳：黄尾嶼が赤尾嶼に連なり、船乗りたちは遠望してはまた疑う）

全魁・周煌コンピの後、嘉慶五年（1800）に正使趙文楷・副使李鼎元の二人が出使の命を受け、琉球を往還した。趙文楷（1760～1808）は『石柏山房詩存』の著を持ち、その中の『槎上存稿』が琉球出使中の吟詠集である。集中の航海詩を調べると、「五月初七日開洋」「舟出五虎門」「渡海放歌行」などと並んで、「過釣魚台」の一句が見られる。

- \* 「大海蒼茫裏、何人釣巨鼈。老龍時臥守、夜夜浪頭高。」<sup>(15)</sup>

（訳：大海蒼茫の裏、誰が巨鼈を釣る？老龍時に臥して守り、夜々浪高し）

一方の李鼎元（1750～1805）は、日記体の見聞録『使琉球記』、及び琉球語辞書『球雅』を以って名声を博するが、『師竹齋集』などの詩文集もあり、「航海詞二十首」をはじめ海の風韻を清らかに伝える作品が溢れている。

- \* 「任公一去無消息、海上何人理釣台（山名）。」

（訳：任公が消え去った後、消息不明。今や海上で誰が釣魚台を利用している？）

- \* 「雷火何年燒赤尾（山名）、斷霞千古映波紅。不知黃尾山何處、海燕群飛落照中。」<sup>(16)</sup>

（訳：雷の火が年月かけて赤尾嶼に赤を焼き付け、断崖絶壁に打ち寄せる波に霞が映る。

黄尾嶼が海の彼方に見え隠れし、カモメの大群が夕焼けに染まる空を飛び交う）

嘉慶十三年（1808）、正使斉鯤（1772～1817）と副使費錫章（1752～1817）が琉球に遣わされた。帰国後、共著『続琉球国志略』の他に、斉鯤は『東瀛百咏』、費錫章は『一品集』をそれぞれ編集、刊行した。『東瀛百咏』には「航海八咏」という連句があり、「五虎門」「鷄籠山」「釣魚台」「赤尾嶼」「黒溝洋」「姑米山」「馬齒山」などを題材としている。

- \* 「釣鼈人已往、但見釣魚台。絶島重重峙、滄波滾滾来。」（「釣魚台」）

（訳：海亀釣りの仙人はどこかへ消え去り、釣魚台だけが取り残されている）



\* 「赤尾連黄尾、参差島嶼分。頼魚身半露、紅日焰如焚。」(「赤尾嶼」)<sup>(17)</sup>

(訳: 赤尾と黄尾が連なり参差として島を分つ。赤魚身半ば露し、紅日焰焚くが如し)

斉費両使の後、道光十八年(1838)に林鴻年と高人鑑が派遣されたが、使琉球録も詩文集も未見だ。同治五年(1866)年に派遣された趙新は最後の冊封使となり、『続琉球国志略』『還硯齋全集』を著したものの、琉球関連の詩作は欠如している。総じて言えば、冊封使の尖閣詩文は、海の景観を描き旅情を詠う詩作として、「物の哀れ」を表現する文人趣味の域を超えておらず、「領土」「主権」云々の感覚など、どこからも読み取れないはずだ。

## 二、「黒水溝」「中外之界」の幻

さて、尖閣諸島の領有権問題を巡る史学的論争において、明清時代の尖閣諸島が無主地だったかどうかは焦点の一つとされている。言い換えれば、当時東シナ海つまり中琉間の海上で「国境」のような線引きがあったかどうか争われてきたわけだ。使琉球録を繙くと、陳侃『使琉球録』に「(五月)五日始発舟、……至八日出海口、……九日隠々見一小山、乃小琉球也。十日、……過平嘉山、過釣魚嶼、過黄毛嶼、過赤嶼、……十一日夕見古米山、乃属琉球者。夷人鼓舞於舟、喜達於家。」とあり<sup>(18)</sup>、汪楫『使琉球雜録』にも「二十五日……遂至赤嶼、……薄暮過郊(或作溝)。……問郊之義何取、曰中外之界也。」などの記述が見える<sup>(19)</sup>。これを根拠に、中台側は「琉球の領域は古米山から」「赤尾嶼以西は中国領、以東は琉球領」と言い張り、牽強付会の説を繰り返している。実際には、使琉球録や冊封使詩文の中で、「黒水溝」「過溝」「米糠洋」「中外之界」など中琉間の海域の境界を意味するとも受け取られる用語・字句が錯綜する半面、示した場所・位置は極めて不明確だ。

先ず、島影を眺めて興奮する船員たちの様子を記した史料から見てみよう。確かに「夷人鼓舞於舟、喜達於家」(陳侃)、「海邦忽伊迓、早晚听夷謠」(郭汝霖)といった記載は少なくない。しかし、苦難に満ちた航海を経て漸く島や陸地が見えてきた時に喜んだのは何も「夷人」「球人」だけではあるまい。趙文楷『槎上存稿』の詩句に登場する「舟人」とは、呉越同舟の境遇に置かれた乗組員全員を指していると解釈した方が自然であろう。

\* 「三日天風便、遥見姑米山。五峰排水面、一線出雲間。……舟人齐举首、驚喜破愁顔。」(「十一日見姑米山(近中山矣)」)<sup>(20)</sup>

(訳: 三日間順風に乗って進み、遥かなる彼方に姑米山が見えてきた。五つの峰が水面に出揃い、稜線が雲の上に覗かせる。……船乗りたちが一斉に鶴首し、破顔して愁眉を開く)

李鼎元『師竹齋集』の航海詩も、尖閣諸島に限らず、航海中、標識島を過る度に「舟人」たちの心が和む様子・雰囲気を如実に伝えている。

\* 「……偷渡鷄籠渾不覚、舟人指点是彭家(山名)。」(「航海詞二十首」)<sup>(21)</sup>

(訳: 気付かずに鷄籠山を通り過ぎた。船乗りたちが彭家山を指差しながら語り合う)

\* 「……莫怪舟人頻指点、海中難得是青山。」(「望姑米山」)<sup>(22)</sup>

(訳: 頻繁に島を指差すことを怪しむ莫れ。航海中、島を見るのは滅多にないことだ)

\* 「三十六島此門戶、絶類竿塘石虎五。」(「馬齒島歌」)<sup>(23)</sup>

(訳: 琉球三十六島と雖も、馬齒島を門戶としている。竿塘(馬祖列島)や五虎門が福建の門戶であることに類する)

ここで、李鼎元が「竿塘・五虎門は福建の門戶だ」と明言したことに留意すべきだ。齊

鯤の「航海八咏」にも「球人」「舟子」に触れた詩句が幾つか見られる。

- \* 「忽睹流虬状、西来第一山。……球人欣指点、到此即郷関（舟中有接封球官、望山喜躍）。」（「姑米山（此山入琉球界）」）

（訳：龍のような形の島が突如現れ、出航してから初めて見た島だ。琉球人船員たちが喜んで指差して騒ぎ、ここまで来たら、故郷に生還したも同然。封舟に同乗した琉球役人は姑米山を見ると大喜びし、この島より琉球の境に入る）

- \* 「中山風引到、保障両峰高。……印須舟子集、礼接大夫劳。」

（「馬齒山（山為琉球門戸）」）<sup>(24)</sup>

（訳：中山国の風が吹いてきて、二つの峰が高く聳え立つ。船乗りたちが忽ち集まってきて、接封大夫に礼を言い労をねぎらう。馬齒山は琉球の門戸だ）

一見、中台側にとって好都合な史料のように思えるかもしれないが、考えてみれば、九死に一生を得た航海が終わりに近づき、故郷の島が漸く見えてきた途端、素直に喜ぶのは何も「夷人」「球人」、対象は「姑米山」「馬齒山」に限った話ではあるまい。というのは、往路で「古米山」「葉壁山」を見かけた時はもちろんのこと、復路で浙江・福建の近海に近づき、中国の島や陸地が見えると、「舟人」（中国人船員）たちの狂喜する姿が、簫崇業・謝傑「見山謡」や徐葆光「後海舶謡」の中でリアルに詠まれているからである。

- \* 「……封舟一去森何之、更憶島中山可指。……舵工迷路随浪逐、海客無謀任転蓬。……魂飛思山処、目断望山時。……舟人日々頻指点、謂雲是山還復疑。驚看波前鴨頭緑、邈然太倉一粒粟。須臾突起喜欲狂、譬若遷喬出空谷。有山海可渡、見山舟可行。開醅使君飲、操觚使君吟。」（「見山謡」簫崇業）

（訳：故国を後にした封舟は、渺茫たる海原を彷徨いながら進み、記憶にある島々を目印に。……舵取りは針路に迷い、ただ潮のまにまに漂い、乗客もなす術もなく風任せにころころ転がる蓬のように。……島を思えば魂は飛んで行き、島を望もうとすれば目途は途中で断ち切られる。……船員たちが毎日頻りに指でさし示し、雲を見て島と言ったりしてまたそうでないと疑う。突然、波の前に鴨の頭の緑が見えてきたかと思うと、遙か彼方に一粒の粟のようなものが視界に入ってきた。間を置かず狂わんばかりの歓声が沸き起こり、何もない谷を出て高い木の枝に飛び移った鳥のように喜ぶ。目印になる島が有ってこそ海は渡れるのだし、島を見てこそ船は航行しうる。濁り酒の封を切って見山酒を振舞い、盃を手にとって詩吟する）

- \* 「船中惜水勝惜漿、洋中見山如見娘。……今朝隱隱波前起、万碧叢中着黒子。舟人指点信復疑、稍看如髮又如眉。風帆去去迅於箭、蒼翠須臾可辨。満船色喜渾欲狂、……七閩連山千百里、処々相看不知喜。」（「見山謡」謝傑）<sup>(25)</sup>

（訳：船の中で水を惜しみ惜しみに使うのは美酒以上だ。海で島を見るのは迷子が母と再会するよりも嬉しい。……今朝波がドドンと船に押し寄せてきて、一面の碧色の草むらの中に黒子のようなものが付いている様子。船員たちがあれは陸だと指差すが、そうだと思う一方で疑いも生まれる。しばらく見つめていると一筋の髪の毛のような、眉のようなものが見えてきた。帆は風を得て矢よりも速く進み、山肌の青緑は間もなく弁別できるだろう。船全体が狂わんばかりの喜びだ……福建は千里にわたって山が連なっているが、山を見るのがこんなに喜ばしいものとは知らない）

- \* 「一霎飲雷動九溟、見山酒盡倒空瓶（見山皆喜酌、酒名見山酒）、随他十二瀛洲好、

不及魚山両点青 (二十四日晨見魚山)。(『船後集』「後海舶謡」)

(訳：一瞬の歓声が雷のように海に鳴り響き、見山酒の壺を傾け、喜びの酌を皆に振る舞う。故国の大地は何処も懐かしいが、やっぱり魚山を見た瞬間は一番嬉しい！)

\* 「回頭一笑別滄海、今日生還五虎門。」(『船後集』「後海舶謡」)<sup>(26)</sup>

(訳：振り返って笑って蒼海に別れを告げ、今日生きて五虎門に戻って来たぞ！)

ともあれ、「古米島が現れると琉球人が喜ぶ」の箇所だけ切り取って、「だから、琉球領は久米島から」とか「赤尾嶼までは中国領」などこじつけるのはナンセンスだ。久米島は福州を出港してから琉球領内に入って最初見た有人島なので、久米島出身の船員は太鼓を打ち踊って喜ぶのは当たり前だ。尖閣のような無人島を見て、琉球人も中国人も何の反応も示さない。実際、帰航で「閩山」「魚山」を見た瞬間、大喜びし、互いに生還を祝う中国人船員の狂喜ぶりは、「古米山」を見た時の琉球人船員に勝るとも劣らないものがあった。

ところで、当時、封舟が尖閣周辺の海域を通過した際、航海安全を祈願する行事として、「過溝」の祭りをを行うのが慣例だった。犠牲の羊や豚を海へ投げ込んだり、武装した兵士たちが海に向けて武器を構えたり、「詔勅在船免朝」(龍や魚よ、詔勅を載せているため参朝を免除)と書いた免朝牌を船首に掲げたりする、いわば風波除けの儀式だ。この行事を執り行った場所と言えば、赤尾嶼と久米島の間にある「黒水溝」と記すのは一般的で、中台側が「黒水溝」こそ中琉間の海上境界線だったと言い張る所以である。実際には、「落滌」「米糠洋」「分水洋」などの名称もあり、位置不明確で混同されることが多かった。

実を言うと、「過溝」の記録は汪楫・周煌・李鼎元・斉鯤の時の四回だけで、汪楫の体験談は前述した通り。周煌は『海東集』「海上即事」で真夜中の「溝祭」を詠んでいるが、その感覚はあやふやなところがある。

\* 「針路微茫日本経 (海舶率用日本羅経)、……出波如蒜見花瓶 (嶼名)。豈知中外原無界、溝祭空煩説四溟 (舟過黒水溝、投牲以祭、相伝中外分界処)。」<sup>(27)</sup>

(訳：針路蒼茫で、日本の羅針盤を頼りに。海船はみな日本製の羅針盤(早羅経)を使う。……花瓶嶼が大蒜のように波から現れた。元々中外に分界線が無かったとは知らず、冥々たる暗い黒水溝の噂を語っても無駄だ。舟が黒水溝を過ぎる時、犠牲の家畜を投げ入れ、祭祀を行う。言い伝えによれば、中外を分界する処だという)

ここで、周煌は「中外原無界」とも「中外分界処」とも言っているが、後者があくまで一種の「相伝」(伝聞・噂話)に過ぎず、実際に明確な線引きがあったわけではない。また、全魁「自南台登舟泛海、抵中山即事十四首」の「其八」を見ると、

\* 「天教一線界華彝、溝水冥々陰火迷」(訳：華夷を界す一線で、溝水黒く陰火暗し)<sup>(28)</sup>

ここでも漠然とした感覚が表現されており、強いて言えば、文明世界と未開社会を分ける一つの目安に他ならない。全魁の従客として同行した詩人王文治(1730~1802)も同じ感覚で、『夢楼詩集』巻二の「海天遊草」を吟詠している。

\* 「黒水之溝深似墨、……方知中外有分疆。」(「渡海吟」)<sup>(29)</sup>

(訳：黒水溝は深くして墨に似る。今になって分かった！中外に分界があることだ) 一方、趙文楷『石柏山房詩存』の「渡海放歌行」を見ると、やや誇張の表現が目立つ。

\* 「海水直下千万里、黒溝之洋不可以径跨。」<sup>(30)</sup>

(訳：海水が直下して千里も万里も流れていき、黒溝の洋を渡るのが至難の業だ) 斉鯤の『東瀛百咏』で暗くて渾然たる「黒水溝」「黒溝洋」が次のように詠まれている。

\* 「大海無中外、渾然劃一溝（旧録云過黒水溝投生羊猪以祭且威以兵）」（「黒溝洋」）<sup>(31)</sup>

（訳：海には中外の区分が存在しないが、渾然たる一溝を劃している。……旧録によると、黒水溝を過ぎる際、生きた羊と豚を投じて祭り、武器を持って威嚇する）

\* 「黒溝之洋深且黝、祭以剛鬣投以羊。」（「渡海吟、用西塘題乘風破浪図韻」）<sup>(32)</sup>

（訳：黒溝の洋は深く且つ黒色。硬い背びれの魚で祭り、羊を投げ込む）

費錫章の『一品集』にも、夜間の「黒溝」を通過する情景を詠んだ二句が見られる。

\* 「執豕牽羊付濁流、……鉦鼓喧天過黒溝。」（「黒溝洋（中外分界処）」）<sup>(33)</sup>

（訳：豚と羊を濁流に投げ込む。……鉦や鼓を打つ音を天にまで響かせ黒溝を過ぎた）

\* 「黒溝行過中華界、鳴金伐鼓投猪羊。」（「題家弟錫輅乘風破浪図」）<sup>(34)</sup>

（訳：黒溝の辺りで中華の界を通り過ぎる。鉦を鳴らし鼓を打ち、豚と羊を投じた）一方、徐葆光の体験は上の諸使と趣を異にする。「琉球属島三十六、畫海為界如分疆」（琉球は三十六の島があり、海を劃して境界を分ける）という認識を示す半面<sup>(35)</sup>、彼は「米糠洋」で「過溝」し、張学礼の体験に通じる。「米糠洋」の位置とえば、「釣魚台」に着く一步手前の海域で、「中外」の代わりに「内外洋」という用語を使ったことに注目したい。

\* 「過溝沈水両豕羊、……舟師報過米糠洋（内外洋分界、名過溝。沉活猪羊以祭。米糠洋水面浮黄沙、如龍涎、横亘無際。）」（「海舶謡」）<sup>(36)</sup>

（訳：過溝の際に二頭の豚と羊を海中に投げ、……船員が「米糠洋を通過」と報告した。内洋と外洋を分ける分界線は「過溝」と言い、活きた豚と羊を沈めて祭る。米糠洋の水面に黄砂が龍の涎のように浮かび、無限に広がって連なっている）

\* 「過溝忽縱金、投以両豕羊（舶至海中央、以海水極清為溝界。）」

（「舶行七日至琉球、従客瓊寧翁長祚作帆海千字詩、因用其韻、載述成篇」）<sup>(37)</sup>

（訳：溝を過ぎる時に急に鉦を打ち鳴らし、二頭の豚と羊を投げ入れた。船が海の中央に至り、碧色透明な海面を以って溝の分界とする）

「海舶謡」における詩作の順序を吟味すると、出帆後の航程に沿って順次に並べられていることが分かる。「両船並駕梅花頭、東湧分舟最急流」（訳：封舟二隻が並んで梅花を出航し、東湧島の最も急流の処で二手に分かれた）→「未見鷄籠聞好識、一針已到小琉球」（訳：未だ鷄籠嶼が見えないが良い知らせが届いた。別の舟がすでに小琉球に着いたと）→「過溝沈水両豕羊、……舟師報過米糠洋」→「鷄籠山去釣魚台、黄嶼応先赤嶼来」となっている<sup>(38)</sup>。こうした位置関係から、徐葆光が「過溝」した「米糠洋」は、「小琉球」「鷄籠山」を過ぎて、「釣魚台」より西の海域にあったと推定できよう。「以海水極清為溝界」という証言を加えると、益々「黒水溝」とは様相が異なり、台湾海峡を流れる黒潮支流の北端に当たると思われる。帰航時の「過溝」様子はなおさら明白だ。

\* 「（舶行七日近中国、始漸寒。二月重裘。）……已踰半月程、何処過溝界（海水滄黒、不見溝界）。十日南杞針（帰舶取温州南杞山）、……四霜凝積簣（魚山四霜皆針所取）、共喜遂生還。」（「帰舶述懷寄家五十韻」）<sup>(39)</sup>

（訳：出航してすでに半月も経ったが、どこに黒水溝があるのか。海水は真っ黒で溝の界が見えない。十日目に南杞、魚山も四霜も次々と現れた。共に生還を喜んだ）すなわち、帰航時の「溝界」は、浙江温州の近海に浮かぶ南杞山・魚山・四霜山の一步手前に位置すると見てよい。中琉間の海には「黒水溝」「米糠洋」と名付けられた潮が流れていて、航海の難所として恐れられていたのは確かだが、詩句から明清の支配圏ないし海



上の境界線を示唆するような表現、感覚を読み取ろうとするのは無理がある。

それどころか、自らの体験や琉球滞在中の聞き取り調査に基づき、「黒水溝」そのものの存在を否定する冊封使すらいた。陳侃と李鼎元はその代表格である。李鼎元は「米糠」と「黒溝」の両方を経験したが、彼の「過米糠洋」は、張学礼、徐葆光らと同様、鶏籠山・花瓶嶼に到着する前に済ませていた。那覇に滞在中、李鼎元は「黒水溝」の噂を嘲笑い、尖閣海域を八回往還したベテランの琉球人船長すら黒水溝の存在を知らないと言証する。

\* 「不信重洋有米糠、今来目撃怪非常。」(「航海詞二十首」)

(訳：大洋には「米糠」があることを信じず、今ここに来て目撃して驚くばかりだ)

\* 「球人罔識黒溝名、祭海唯看赤尾横。……(球人不知黒溝、但見赤尾嶼、即投猪羊以祭。此行実不見溝、因即令投祭)。」(「航海詞二十首」)<sup>(40)</sup>

(訳：琉球の人は黒溝の名を知らず、ただ赤尾嶼を見たら海祭りをする。……琉球人は皆黒溝を知らず、ただ赤尾嶼を見ると豚羊を投じて祭る。今回の航海も目睹はしていないが、前例に従い、犠牲を投げて祭らせた)

\* 「黒溝震虚名、赤洋競鑿空。」(「後航海詩六首」)<sup>(41)</sup>

(訳：黒溝は虚名を震い、赤洋は競って空をうがう)

一方、中国側の境界に触れた詩句も多く見られる。中台の論客が決して触れようとしないうが、「見古米山、乃属琉球者」の記載と表裏一体をなしている。先ず、胡靖『中山詩集』にある「漢疆」(中国領) — 「殊域」(外国領) を強く意識した出征詩を見てみよう。

\* 「傾都物色属相望、此日維揚出漢疆。……舟經五虎分殊域、地轉三江入巨洋。」(「広石揚帆」)<sup>(42)</sup>

(訳：盛大な出発式典を挙げ、本日より中国の疆域を発つ。……封舟が五虎門を経て異国の域に分け入り、三江を出ると大海原へ入る)

例の「中外之界」を記した汪楫も、『観海集』で「過東沙山是閩山盡処、同石来次簫給事韻」を詠むが、題名から「東沙山(西犬島)を過ぎると、閩山(福建の島嶼)の尽きる処だ」という感覚がはっきり読み取れよう。福州の港を出航した直後、尖閣に向かう途中(「過溝」する前)のことを言っているところに留意すべきだ。詩句は以下の通りである。

\* 「去国迴看忽千里、無辺藍水接青霄。」<sup>(43)</sup>

(訳：国を離れて振り返れば忽ち千里となり、無辺の藍水が青空の際に接している)

もう一つ興味深い史料に、封舟を護送する巡視船を詠んだ徐葆光『海舶謡』の詩があり、巡視船の折り返し地点に注目したい。それを見れば、清朝水師の活動範囲が福建近海の「官塘」(馬祖列島)までだったことは一目瞭然だ。

\* 「螺角鳴々声漸遠、閩安鎮上哨船回(有司撥鎮上八槳哨船送出五虎門、至官塘進士門而回)。」(『海舶謡』)<sup>(44)</sup>

(訳：鳴り響く法螺貝の音が次第に遠退き、巡視船が閩安鎮に戻って行った。出発の際、閩安巡検司が八つの楫付きの巡視船を派遣し、五虎門を出るまで封舟の護送をさせてくれた。官塘島の進士門辺りで巡視船を帰らせた)

李鼎元『使琉球記』にも「(五月)初七日、……丁未風、乗潮出五虎門、日入過官塘、越進士門。……随遣護送船回」と記されている<sup>(45)</sup>。帰国後、趙文楷と李鼎元が皇帝に提出した『題本』(復命書)を見ると、「十一月初一日、計期六日即抵閩省之竿塘洋面、先經督臣玉徳派撥舟師在彼迎護」とあり<sup>(46)</sup>、帰航の際も、護送船が「竿塘」(官塘)まで出迎え

に派遣された。このように、清代の海上境界は福建近海を超えないことが分かる。

なお、「黒水溝」「黒溝洋」での「過溝」を詠んだ斉鯤の場合、「鷄籠山」を以って「中華界」と見做し、「黒溝行過中華界」という同行者費錫章の見方と趣を異にしている。台湾島を清朝版図の境界とする斉鯤のこの認識に対し、中国論客が黙殺したのも無理はない。

\* 「猶是中華界、蒼茫四望空。」（「鷄籠山（山在台湾府後）」）<sup>(47)</sup>

（訳：鷄籠山は未だ中華の領域だが、蒼茫として四方を眺望しても何も見えない）

\* 「楼船峩々出五虎、西南風動大旗揚。……鷄籠山過中華界、針盤遙指牛服箱。」

（「渡海吟、用西壩題乘風破浪図韻」）<sup>(48)</sup>

（訳：楼船が聳え立って五虎門を出港し、西南風が吹いて大旗が揚がった。……封舟が鷄籠山で中華の界を通り過ぎ、羅針盤の針が遥かに東を指している）

このように、「中外之界」を巡る冊封使たちの認識・感覚は四つのタイプに大別できる。一つ目は、赤尾嶼と久米島の間で「黒水溝」「黒水洋」を過り、「過溝」「祭海」の体験をした汪楫、周煌、費錫章らの見方で、「去由滄水入黒水」と記した明代の謝傑と夏子陽を入れても六人（六回）ほどあった。二つ目は、張学礼・徐葆光・李鼎元ら三人が「分水洋」「米糠洋」を以って線引きとし、台湾海峡を指している。三つ目は、陳侃・郭汝霖・簫崇業・胡靖・林鴻年・趙新らの無記載（未体験）で、最多である。四つ目は、「過溝」説を胡散臭く思い、「落滌」「黒溝」の实在を否定した陳侃と李鼎元だ。簫崇業も夏子陽も「落滌」なんか知らないと言っている。胡靖・斉鯤・趙新らに至っては、「閩山」「福寧州山」「鷄籠山」「中華外山」といった台湾・福建の島を「中華界」と呼ぶ人もいた。いずれにせよ、「黒水溝」も「米糠洋」も、漠然とした名称・用語で、東シナ海の海域を流れる黒潮を意味している。「中外之界」と言っても、「国境」「領海」などの概念・意識・感覚と無関係で、精々今日の「中華文化圏」という言葉に近いニュアンスで使われていたと言えよう。

### 三、琉球出身の役人・船乗りへの称賛

ところで、中台側の主張の中に「最初釣魚島を発見、利用したのは中国人だ」「造船・操船の技術に劣る琉球人が先に釣魚島を見つけるはずがない」との言説も喧しい。実際には、毎回冊封使の派遣が決まると、首里王府から冊封使を出迎えるための役人と船乗りが福州に派遣されるのが慣例だった。封舟に同乗する彼らは、「接封大夫」「通事」「夥長」「看針」「舵工」「鴉班」として、通訳・水先案内・針路係・舵取り・マスト要員など様々な役割を果たす。冊封使帰国の際も、彼らはまた封舟に乗り込み、或いは謝恩船を操縦して福州まで送り届ける。「天使」の航海安全を守るための至れり尽くせりの護送船団だ。

陳侃は『使琉球録』の中で、「是月、琉球国進貢船至、予等聞之喜。……翼日、又報琉球国船至、乃世子遣長史蔡廷美来迓余等。……長史進見、……又道世子亦慮閩人不善操舟、遣看針通士一員、率夷稍善駕舟者三十人、代為之役。則又喜……有同舟共濟者矣」と述懐している<sup>(49)</sup>。そもそも、冊封使は航海術の素人で、地元で募集した船乗りも琉球に渡った経験を持たない。それゆえ、年に何度も進貢船に乗って福建―琉球航路を往還した琉球の役人・船乗りが頼りにされたのも至理当然だ。航海中、羅針盤を見て針路を指示する夥長、その指示通り操舵する舵工、帆柱をよじ登って島影を眺望する鴉班らの身の熟しは、冊封使に鮮烈な印象を与えたに違いない。事実、「海道往来、皆頼夷人為之用」（陳侃）、「大都海為危道、……至夷熟其道者、又須用夷人。夷王遣夷稍三十人来接、正為此也」（謝傑）と

いった証言は枚挙に暇がない<sup>(50)</sup>。

郭汝霖は、書簡「奉京中諸老」に「上年四月内、欽承冊封琉球之差、艤舟南下。九月中抵閩省、促有司造船渡海。十一月終、夷国差長史梁炫等帶集夷稍来迓」と書いている<sup>(51)</sup>。帰航途上、一行の封舟が暴風荒波に襲われ、舵を固定するロープが切れ、難破寸前の状態に追い込まれてしまった。絶体絶命の中、腰に縄をつけて荒海に潜り込んで切れた舵のロープを繋げようと頑張ったのが琉球船員だった。彼らの勇気に大感激した郭汝霖は、この一件を『重編使琉球録』に書き留め、漢詩にも感謝の気持ちを込めて詠んだ。

\* 「鷄呼馬叫如人搆、拳舫哀声不忍聞。……三日換舵危苦甚、舵換舟人回生澤。」（「洋中折舵歌」）<sup>(52)</sup>

（訳：鷄が騒ぎ馬が叫ぶように、船全体は恐怖な叫び声が響き渡る。……舵が壊れて危険に晒された三日間、やっと舵を取り換えることができ、皆生き返った心地だ）

\* 「長風破浪舟応捷、宝剑揺光斗自廻。聽令魚龍先浄海、迎恩夷部幾登台。」（「琉球長史至」）<sup>(53)</sup>

（訳：順風に乗って船が波を切って走り、満天の星が夜空を回る。勅令を發して龍魚に海の道を開かせようと、冊封使を迎える琉球役人が何度も将台に上がってきた）

徐葆光の『舶中集』を繙くと、詩文の行間に「接封陪臣三人在舶為郷導」「陪臣例於先一年冬至至福建接封」「三月廿四日至福建、大夫迎勞於館次」「接封陪臣例附封舟以辨針路」といった割り注が多く、冊封使の迎接を担当する専門職である「接封大夫」の言動を詳細に記録している<sup>(54)</sup>。彼の渡航に付き添った「接封陪臣」とは正義大夫陳其湘であり、滞在中大量に詠まれた「贈接封大夫陳其湘二十韻」「贈紫金大夫程順則」「贈阮大夫維新」「採芝歌贈蔡大夫茂功」「題蔡大夫文溥詩後四絶句」「贈紫金大夫蔡温」といった贈詩・唱和詩が、琉球の役人・文人たちとの懇意親交ぶりを物語っている。

\* 「海客通華語、重溟久一家。……黄帕威儀肅、清風応対嘉。不須煩訳伴、却喜共星槎。……周諮欣有頼、譚笑指無涯。振柁神常定、更船算不差。……乍試窺天管、彌慚伏井蛙。」（「贈接封大夫陳其湘（字楚水、能華語）二十韻」）<sup>(55)</sup>

（訳：琉球人でありながら中国語が堪能な君よ。……黄色の頭巾は威厳のある風貌に似合い、重々しい振る舞いだが慎み深い。爽やかに対応してくれてとても嬉しい。煩わしい通訳をつける必要もなく、一緒に封舟に乗るのを楽しみにしている。……度々アドバイスをいただき、頼り甲斐があることを喜んでいる。果てしない海を指しながら談笑する。落ち着いて舵を取り、航路などすべて計算通りだ。……管の中を通して天を覗いたように、自分の見識はいわば井戸の中の蛙だと慚愧する）

\* 「參差六点乱雲間、国北先看葉壁山。……（舟行七日、始見東北小山六点。接封大夫云此国北葉壁山。将近山合為二、過之回望、已成一山）。」（「海舶謡」）<sup>(56)</sup>

（訳：高低不揃い六つの山が雲の隙間に現れ、琉球の北に葉壁山が見えてきた。……船が七日間航行して東北方向に小山六つが見えてきた。接封大夫が言うには、これは琉球国の北にある葉壁山。近づくと山は合わさって二つになる。通り過ぎてから振り返ると、もう山は一つに見えた）

徐葆光のこうした褒め言葉から、琉球役人がどれほど頼りにされていたかは窺えよう。また、琉球船員の活躍ぶりを礼賛する詩句も多く見られる。

\* 「重購望山賞、双鴉意争睹（見山者懸賞、鴉班二人踏檣、上下如飛）。縁索上愧顛、

軽捷竄鼯鼠。朝来果見山、一抹修眉嫵。」

（「舶行七日至琉球、従客瓠寧翁長祚作帆海千字詩、因用其韻、載述成篇」）<sup>(57)</sup>

（訳：望山賞を懸賞したところ、二人の鴉班が意地を張って競う。先に島を発見した者に賞金を出すので、マスト係の二人が帆柱をよじ登り、上下して飛んでいるようだ。ロープを伝わって帆柱の天辺まで上がり、その素早さは逃げる鼠のようだ。翌朝になると本当に島影が見えてきて、微かに整えた乙女の細長い眉のように美しい）

\* 「開縵蓬回倚縵斜（蓬在左曰開縵、在右曰倚縵）、如飛下上有雙鴉（鴉班二人上檣、望温州南杞山）。千尋海底探沉綆、一朵峰頭出浪花（……登檣始見台州山。浪高於山、舟漸行、山漸從浪頭出）。」（「後海舶謡」）<sup>(58)</sup>

（訳：帆を揚げたり降ろしたり、二人の鴉班が飛ぶようにマストを登ったり降りたりして、帆柱の天辺から温州の南杞山を眺望する。千尋も深い海底に測りの重りを降ろし、一つの峰が波濤から浮かび上がってきた。やがて台州の島も見えてきた。）

周煌の『海東続集』にも琉球出身の船乗りを称える詩句があり、郭汝霖に似通った体験を詠い上げ、絶賛と言ってよいほどの褒め方をしている。

\* 「長繩千尺繫如無、日々更番入水濡（椀繩數斷日、遣球人泗水易之）。」

（訳：千尺の長い繩を腰に繋ぎ、毎日交代で海中に潜る。錨のロープが切れた日、琉球人船員を命じて海に潜ってロープを交換させた）

\* 「喚出鴉班來駕浪、健兒真是可憐人（……鴉班主登檣瞭望、上下如飛。至於出沒波濤、游行自在、惟球人能之。杉板既遣、勢不復來、急命鴉班泗取、須臾立至）」<sup>(59)</sup>

（訳：呼び出した鴉班が波の上を駆け、屈強な若者は頼もしい。帆柱に登って見張りし、上り下りはまるで飛ぶようだ。荒海に潜って泳ぐなんて、琉球人船員ならではの特技。救命ポートが海に落ちてしまっただけで段々遠ざかっていった時、鴉班を命じて海に飛び込み、あっという間に取り戻してきた）

李鼎元は出航前、乗組員の役割分担を記述するに当たり、「鴉班」について特筆する。曰く「海船以鴉班為重。每舟三人、人管一桅。各披紅執旗、緣一繩而上、疾如飛、不負鴉班之目」<sup>(60)</sup>。『師竹齋集』を繙くと、やはり鴉班の描写は微笑ましい。

\* 「西南風利護舟還、一出官塘便少山。驚浪打蓬棲不定、桅梢尽處有鴉班（舟人時緣一繩以上桅、疾如飛、故名曰鴉班）。」（「航海詞二十首」）<sup>(61)</sup>

（訳：西南風が吹き護送船が帰った。官塘を出ると島が少ない。波が打ち寄せ帆が揺れる。帆柱の先端に鴉班がいる。彼らが一本繩をよじ登り、飛ぶように素早い）

\* 「急浪推船行、旗角尽西翥。鴉班氣飛揚、夥長聲急遽。」（「那霸登舟」其四）<sup>(62)</sup>

（訳：激しい浪が船を推し進め、旗の角が一斉に西の方向へ靡く。鴉班は意気揚々、指示を出す夥長は声が荒い）

その他、齊鯤の『東瀛百詠』も「鴉班」に対する褒め言葉を惜しまない。

\* 「鴉班捷若猱昇木、健卒袴褶縛戎裝。」（「渡海吟、用西壩題乘風破浪凶韻」）<sup>(63)</sup>

（訳：鴉班の身のこなしが軽いこと、まるで木を登る猿みたい。健児服装の着こなしがまるで軍服姿だ）

似たような記述は使琉球録の中に散見されるが、重要なのは航海中、冊封使が琉球役人・船乗りらに標識島の名前、位置、那覇までの距離、方角などを頻りに訊ねる場面である。中国人船員に比べ、琉球の人たちが進貢船・接封船・接貢船・謝恩船・護送船・慶賀使船



など様々な名目で、年に何回も福建－琉球航路を往還したため、航路を熟知していると思われた所以であろう。文中、「詢之夷人」「問知琉球境内」「令夷梢上桅以覘」といった記述が多く、尖閣諸島の存在も琉球出身者が冊封使に教示したのではないかと推察する。

#### 四、清朝・琉球文人の尖閣詩句

琉球冊封使の詩文集として、上記したものを除いて、『星槎録』(李際春)、『球陽竹枝詞』(汪楫)、『琉球竹枝詞』(林麟昌)、『使琉球詩』(海宝)、『海槎集』(趙文楷)などの数種もあると伝えられているが、散逸して未見である(周煌『琉球国志略』に僅か収録)。一方、冊封使以外の清朝文人が詠んだ尖閣詩句も若干残っているが、冊封使のために催された送別会の席での応酬が殆どで、耳学問の類に外ならず、史料としての価値は乏しい<sup>(64)</sup>。

清代後期、浙江錢塘出身の文人陳觀西(1799～1849)は、道光十八年(1838)に冊封副使高人鑑の従客として琉球を往還し、帰国後、琉球出身の留学生を引き受けて指導することもあったらしい。彼の『含暉堂遺稿』巻二に「琉球雜詠」があり、渡琉時の作品を収めている。下記の航海詩を見ると、明らかに「釣魚台」と「花瓶嶼」の順序を間違えた。

\*「釣魚台過問花瓶、万里靈槎耀客星。」(「釣魚台」)<sup>(65)</sup>

(訳：釣魚台を過ぎた後、花瓶嶼を訪ね、万里の宝船に客星が耀く)

また、清末光緒八年(1882)、湖南湘陰出身の文人周發藻(1836～1915)が旧友黄逢昶の雑記『台湾生熟番紀事』に書いた巻頭題詩には、「釣魚山」の地名が登場している。

\*「幕府昨逢余節度、地図先問釣魚山。」(「周定軒夫子題辭」)<sup>(66)</sup>

(訳：幕府は昨日余節度に逢い、地図を広げて先ず釣魚山を問う)

『台湾生熟番紀事』の内容と言え、台湾の地形や原住民に関する紹介だが、台東に棲む原住民部落を紹介する一節において、「海舟從沙馬磯頭盤転而入卑南覓諸社。山後大洋之北有嶼、名釣魚台、可泊巨舟十余隻。崇爻山下泗波瀾、可進三板船、漳泉人多有至其地者」との記述が見られる<sup>(67)</sup>。周發藻はこれを見て「地図先問釣魚山」と詠じたのかもしれないが、元を正せば、康熙六十一年(1722)に台湾を視察した御使黄叔瓚が著した『台海使槎録』巻二「武備」にある記述の引用か孫引きに他ならない。中台側がよく「切り札」として取り上げた史料ではあるが、黄叔瓚の言う「山後大洋北有嶼、名釣魚台」というのは、今日の尖閣諸島ではなく、台東県成功鎮の三仙台嶼を指していると推察する。

翻って、琉球側にも尖閣諸島を題材とする詩作があった。咸豊十年(1860)十一月十七日、琉球役人の蔡大鼎(1823～1884)は、「存留通事」(福州琉球館駐在通訳)に赴任するために進貢船に乗り込む。那覇を出港後、風待ちのために慶良間諸島・八重山の浦に一時泊り、翌年二月二十五日に福州を目指して出帆する。船は尖閣諸島を経て浙江近海に辿り着いた後、大陸沿岸に沿って福州に到着した。その後、三年余り異郷の地で見聞したものをその折々に漢詩に詠み、帰国後、紀行漢詩集『閩山游草』をまとめた(1873年刊行)。総数 280 首中、尖閣諸島などの標識島を詠んだ漢詩も数首含まれている。「釣魚台」という中国名ではなく、「魚釣台」という琉球名を用いたところに注目すべきだ。

\*「十幅蒲帆風正飽、舟痕印雪迅如梭。回頭北木白雲裏、魚釣台前瞬息過。」

(「二月廿五日八重山開洋四首」其三)<sup>(68)</sup>

(訳：十幅もある棕櫚の帆は風を孕んで、船は雪のような飛沫を飛ばして速いこと梭の如し。振り返ると八重山は白雲の中に、魚釣台の前を瞬く間に通り過ぎていく)

\*「安瀾万里挂東風、遠影孤帆旭日紅。早過万重山以外、竿塘下碇喜無窮。」（同、其四）

（訳：穏やかな海に万里の東風が吹き、遠ざかって影となった孤帆に旭日が輝く。折り重なるように続く島を速やかに通り、官塘に錨を下して、この上ない喜びに浸る）

興味深いことに、蔡大鼎詩作の証左となるような絵図の現存が確認された。沖縄県立博物館・美術館所蔵の「渡閩航路図」（紙本著色、33.4×583）は、那覇から福州に至る往路の航海図で、1840年代以降の製作と思われる。図面を見ると、那覇港から福州の閩江内港まで琉球船の航路を示す朱線が何本も引かれており、経由する島嶼として慶良間・慶留間・久米島の先に、船上から眺めた尖閣諸島の形状がリアルに描かれ、「赤尾島—久米赤島」「黄尾島—久場島」「魚釣台」と記されている<sup>(69)</sup>。本図は、途中の標識島だけでなく、危険な岩礁や浅瀬、島嶼間の里程、針路の方角が書き込まれ、福州にある琉球人の活動拠点である「琉球館」や琉球船の停泊地「蕃津浦」も表記している。このことから、琉球学者程順則の『指南広義』や冊封使録の「過海図」「針路図」を参考にしたとしても、実際に福州へ渡った経験豊かな琉球人船乗りたちの情報に基づいたものであろう。

最後に、道光年間に清朝国子監に留学した琉球官生鄭学楷の「海上觀潮歌」を取り上げたい。琉球官生の漢詩を収録した『琉球詩録』を繙くと、中国歴代詩歌の換骨奪胎に過ぎぬ代物が多い中、久米島から鷄籠山を経て五虎門に至る全航程を詠んだ吟詠は一首あった。

\*「長帆十幅出姑米、蒼茫万里無津涯。……三日初看鷄籠嶺、四日已到五虎台。」<sup>(70)</sup>

（訳：十幅の長帆を張って姑米島を出航。蒼茫として万里の旅は果てしない。

……三日目に鷄籠嶺を過ったばかりで、四日目にはもう五虎台に到った）

こうして見ると、清人詩文の中に尖閣諸島が詠まれたことは、恰も琉球漢詩の中に中国の島々が詠まれているのと同様、単に創作題材として使われただけのことである。それ以上でも以下でもない。琉球漢詩に「魚釣台」「鷄籠嶺」「五虎台」などの地名が登場しているのを理由に、「これらの島は琉球領」とは言えない。同様に、明清詩文の中に尖閣諸島が登場しているからと言って、「釣魚島は中国固有の領土」というのも理不尽な話だ。

#### おわりに

以上、明清琉球冊封使の詩文の中に見られる尖閣諸島関連の詩句について概観してきた。総じて言えば、彼らの航海詩において、景観描写の対象もしくは旅情の心象風景として、「釣魚嶼」などの島嶼が詠まれているのは確かであるが、分量はそれほど多くないし、あくまで文学的描写・叙情の文脈の中で詠まれたもので、「領土」「疆域」の意識と無関係だ。「黒水溝」も題材の一つだったが、これも一種の冒険譚に過ぎず、位置・場所は不明確な上、冊封使同士の認識・感覚がかなりずれている。一方、封舟に同乗した琉球出身の役人・船乗りたちは、冊封使の称賛を浴びるほど渡航に重要な役割を果たした。それだけでなく、冊封使が尖閣諸島の存在を知ったのも彼らに教わった公算が大きい。それにしても、航海の情景や旅情を詠じる古の風流人の詩意・詩境は、この世の凡夫によって、領有権論争の証拠材料に利用されたとは、不粹の極みではないか。

#### 注

(1) 羅時進「明清釣魚島詩歌及其相關文獻考述」(『文芸遺産』2014年第1期)、韓結根「歴代釣魚島詩歌解説」(『文匯報』2013年7月27日) <https://www.wenkuxiazai.com/doc/c261c803fc4ffe473368ab22.html>

- (2)郭汝霖『石泉山房文集』卷三、『四庫全書存目叢書』集部第129冊、濟魯書社、1997年、409～410頁。
- (3)郭汝霖『重編使琉球録』、殷夢霞等編『国家図書館蔵琉球資料統編』上、北京図書館出版社、2002年、51頁
- (4)簫崇業・謝傑同撰『使琉球録 附皇華唱和詩』台湾学生書局、1977年、322頁。
- (5)汪楫『觀海集』、王函選編『国家図書館蔵琉球資料三編』上、北京図書館出版社、2006年、59頁。
- (6)汪楫『使琉球雜録』、黃潤華等編『国家図書館蔵琉球資料匯編』上、2000年、801～802頁。
- (7)徐葆光『海舶三集』、前掲『国家図書館蔵琉球資料三編』上、143頁。
- (8)同上、187～188頁。以下、一部の漢詩を和訳するに当たり、原田禹雄訳注『冊封琉球使録集成』(榕樹書林)、鄔揚華著『徐葆光奉使琉球詩 舶中集詳解』(出版舎 Mugen、2010年)を参考にした。
- (9)同上、192頁。
- (10)徐葆光『中山伝信録』台湾文献叢刊第306種、台湾銀行經濟研究室編印、1972年、13～14頁。
- (11)周煌『海東集』卷上、前掲『国家図書館蔵琉球資料三編』上、334～335頁。
- (12)同上、『海東集』卷下、360頁。
- (13)同上、362頁。
- (14)全魁『乘槎集』、方寶川、謝必震主編『琉球文献史料彙編』清代卷、海洋出版社、2014年、1063頁。
- (15)趙文楷『石柏山房詩存』卷五、前掲『国家図書館蔵琉球資料三編』下、43頁。
- (16)李鼎元『師竹齋集』卷十二、同上、190～191頁。
- (17)齊鯤『東瀛百咏』、同上、322～323頁。なお、『統琉球国志略』「諭祭海神文」には「瞻赤嶼以開洋」。
- (18)陳侃『使琉球録』、前掲『国家図書館蔵琉球資料匯編』上、26～27頁。
- (19)汪楫『使琉球雜録』、同上、801頁。
- (20)趙文楷『石柏山房詩存』卷五、前掲『国家図書館蔵琉球資料三編』下、46頁。
- (21)李鼎元『師竹齋集』卷十二、同上、190頁。
- (22)同上、192～193頁。
- (23)李鼎元『師竹齋集』卷十四、同上、254～255頁。
- (24)齊鯤『東瀛百咏』、同上、324～325頁。
- (25)簫崇業・謝傑前掲書、322～323頁。
- (26)徐葆光『海舶三集』、前掲『国家図書館蔵琉球資料三編』上、279～280頁。
- (27)周煌『海東集』、同上、361頁。
- (28)全魁『乘槎集』、前掲『琉球文献史料彙編』清代卷、海洋出版社、2014年、1063頁。
- (29)王文治『夢樓詩集』卷二「海天遊草」、前掲『国家図書館蔵琉球資料三編』下、550頁
- (30)趙文楷『石柏山房詩存』卷五、同上、44頁。
- (31)齊鯤『東瀛百咏』、同上、323～324頁
- (32)同上、326～327頁。
- (33)費錫章『一品集』、同上、440頁。
- (34)同上、445頁。
- (35)徐葆光『舶中集』「琉球三十六島図歌」、前掲『国家図書館蔵琉球資料三編』上、223頁。
- (36)徐葆光『舶中集』「海舶謡」、同上、187頁。
- (37)徐葆光『舶中集』、同上、190頁。
- (38)徐葆光『舶中集』「海舶謡」、同上、186～187頁。
- (39)徐葆光『舶後集』、同上、274～275頁。「後海行日記」には「是日(二十日)、海水見綠色。夜過溝、

- 祭海神。……二十四日、……至魚山及鳳尾山、二山皆属台州」と記す。前掲『中山伝信録』、17頁。
- (40)李鼎元『師竹齋集』卷十二、前掲『国家図書館蔵琉球資料三編』下、190～191頁。
- (41)李鼎元『師竹齋集』卷十四、同上、257頁。
- (42)胡靖『琉球記 附中山詩集』、前掲『国家図書館蔵琉球資料匯編』上、2000年、291頁。
- (43)汪楫『觀海集』、前掲『国家図書館蔵琉球資料三編』上、56頁。
- (44)徐葆光『舶中集』、同上、186頁。
- (45)李鼎元『使琉球記』卷三、前掲『国家図書館蔵琉球資料統編』上、750頁。
- (46)李鼎元著、原田禹雄訳注『使琉球記』榕樹書林、2007年、506頁。
- (47)齊鯤『東瀛百咏』、前掲『国家図書館蔵琉球資料三編』下、322頁
- (48)齊鯤『東瀛百咏』、同上、326頁
- (49)陳侃『使琉球録』、前掲『国家図書館蔵琉球資料匯編』上、20～21頁。
- (50)謝傑『琉球録撮要補遺』、夏子陽撰『使琉球録』台湾学生書局、1969年、261頁。
- (51)郭汝霖『石泉山房文集』卷六、前掲『四庫全書存目叢書』集部第129冊、468頁。
- (52)同上、卷一、390頁。
- (53)同上、卷四、418頁。
- (54)徐葆光『舶中集』、前掲『国家図書館蔵琉球資料三編』上、193頁、198頁。
- (55)同上、198～199頁。
- (56)同上、188頁。
- (57)同上、192～193頁。
- (58)同上、「舶後集」、278～279頁。
- (59)周煌『海東統集』、前掲『国家図書館蔵琉球資料三編』上、414～415頁。
- (60)李鼎元『使琉球記』卷三、前掲『国家図書館蔵琉球資料統編』上、744～745頁。
- (61)李鼎元『師竹齋集』卷十二、前掲『国家図書館蔵琉球資料三編』下、189～190頁。
- (62)李鼎元著、原田禹雄訳注『使琉球記』榕樹書林、2007年、485頁。
- (63)齊鯤『東瀛百咏』、前掲『国家図書館蔵琉球資料三編』下、328頁
- (64)差し当たり、前掲『琉球文献史料彙編』清代巻に見られる三句を挙げておく。「平佳彭佳舵尾辨、黄嶼赤嶼針頭移」（汪懋麟、837頁）、「針分甲乙、道経亦坎黄麻。船避礁崗、山有鷄籠馬岳」（徐嘉炎、903～904頁）、「五日釣魚台、三日平佳湾。黄尾與赤尾、島嶼相連環」（錢福林、1115頁）。
- (65)陳觀西『含暉堂遺稿』卷二、『清代詩文集匯編』第600冊、544頁。前掲羅時進論文。ちなみに、趙新の従客・林熙『中山紀游吟』には「過釣魚台」「渡黒水洋」の句があると言われるが、未見。
- (66)黄逢昶著『台湾生熟番紀事』台湾文献叢刊第51種、台湾銀行經濟研究室編印、1959年、3頁。
- (67)同上、6頁。
- (68)輿石豊伸訳注『蔡大鼎集 閩山游草 続閩山游草』オフィス・コシイシ、1997年、177～178頁。
- (69)絵画史料研究会『琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究』思文閣出版、2019年、94～95頁。なお、「琉中海路図」（仮名称）という「所有者匿名」の手書き彩図も現存。こちらも「魚釣」「久場島」「久米赤島」と表記している。原田禹雄訳注『張学礼 使琉球記』榕樹書林、1998年、口絵。
- (70)阮宣詔、向克秀等著『琉球詩録』、前掲『国家図書館蔵琉球資料匯編』下、795～796頁。

附記 本論文は、山陽学園大学令和2年度学内研究補助金によって進められている研究成果の一部であり、ここに厚く謝意を表す。